

年4月22日に村の一部が警戒区域に設定された。しかし、この行政の対応は、遅きに失した。原発事故をめぐる人々の生死を意識した活動は、すでに震災当日から始まっていたのである。

現在、川内村は、警戒区域を解除され、約3,000人の村民のうち、村に戻ったのは500人余りと言われる。元の警戒区域内の住民は約350名だが、片付けなどで自宅に戻る人は少ない。元警戒区域の除染は国が行うことになっており、民家周辺の除染を早急に終えるよう求めているが、なかなか進まない（朝日新聞、2012年5月3日付）。

川内村では多くの「モノ・コト」⁵が失われたままである。

- ① 昭和23（1948）年から毎年開催された夏季野球大会（しかし、2011年8月15日に避難場所の近くであった郡山市の開成山野球場で開かれた）。
- ② モリアオガエルの繁殖地として国の天然記念物に指定されている天伏沼。
- ③ 「カエルの詩人」として知られる草野心平さんをしのぶ「天山祭り」（草野さんの蔵書を取めた天山文庫の完成を祝って昭和41（1966）年から始まった）。
- ④ 高塚高原で開かれる「かわうち高原ドウダンまつり」
- ⑤ いわなの郷。
- ⑥ 川内小運動会（村唯一の小学校の運動会は、毎年5月）。

2. 避難場所としての川内小学校

H22年度学校要覧によると、川内小学校は、H16（2005）年4月より、川内村の3つの小学校を統合し、新生川内小学校として開校されているから新設校として、きれいな校舎であった。

猪狩氏によると、「川内小学校は、僻地小規模校であり、校舎は、木のぬくもりに包まれた暖かみのある作りとなっている。そこには、400mトラックがとれる広い校庭や全校児童が集うランチルーム、大小二つの屋内プール、光通信が整ったパソコン室、集会活動もできる暖房完備の広い廊下など、設備面でも大変充実しており、村をあげて教育に力を入れていた場所であった。平成22年度3月11日の時点では、全校児童数114名、教職員数14名〔高島仁（校長）、林典行（教頭）、猪狩勝人（教務）〕、学級数7だった」。

避難場所は、村内で20カ所設置されたと言われているが、村役場HPによると、17カ所である⁶。その内訳は、

地区センターや集会所で14カ所、小学校1カ所、中学校1カ所、保育所1カ所である。小学校が大規模施設であることは間違いない。ちなみに学校要覧によれば、敷地面積37,900㎡で、校舎3,777㎡、屋内運動場1,308㎡、屋内プール365㎡で、校庭は、約32,450㎡である。

2,200名の避難者が押し寄せたというから、寝泊まり可能な場所を校舎+屋内運動場（5,085㎡）として仮定すると（以下の猪狩氏の証言によると、避難スペースは実際にはそれより少ない）、一人のスペースは、2.3㎡で、畳一畳分より少し広い程度であり、いかに劣悪な環境を強いられたかが数字の上からもわかる。

校内の使用状況を、猪狩氏は次のように、証言している。

- ① **職員室** 避難所スタッフの運営拠点として使用していました。役場スタッフの方にも、学校にあるあらゆる設備、備品を使っていただきました。コピー機、パソコン、電話、筆記用具、ハンドマイク、放送機器、湯沸かしポットなど、使える物は、校長先生の判断で、全部使っていただきました。
- ② **校長室** 避難所スタッフが打ち合わせをしたり、仮眠や休憩をしたりする場所として使用しました（みんな不眠不休なので、交代で休むようにしていました。そういう場所が必要でした。）
- ③ **保健室** 乳児のいる方に入ってもらいました。暖房設備や、ほ乳びんを洗ったり、おむつを交換したり、おしりを拭いたりできる水道設備が整っていたのです。洗濯機もありました。
- ④ **コンピューター室、図書室** 暖房設備が整っていたので、お年寄りの方を中心に入っていただきました。床もカーペットでしたので、幾分暖かかったです。
- ※ ③④は、特にエアコンがあったので、このような判断をしました。他の教室や廊下（多目的スペース）、ランチルームにも暖房設備はありましたが、そこは、燃料がつきる可能性もあったので、校長先生・教頭先生の判断により、避難当初から、お年寄りの方を中心に入っていただくことにしました。
- ⑤ **家庭科室** 支援物資を調理する場所として使用しました。
- ⑥ **各教室と南側校舎多目的スペース（廊下）** 避難者で溢れかえっていました。最も人数が多かった所です。みなさん机を脇にずらしたり、重ねたりして、自主的に避難スペースを作っていました。

- ⑦ **玄関前スペース** 暖房設備はなかったのですが、広いスペースがあり、避難所として使用しました。ただし、目の前が昇降口（玄関）でしたので、開放を禁止しました。みなさんの寒さを少しでも軽減するためです。
- ⑧ **会議室** 保健師さんに常駐してもらい、具合の悪い方を見てもらう所になりました。ここにもエアコンがあるので、そういう場所として使用しました。
- ⑨ **ランチルーム** かなり広いフロアなので、避難者の方で溢れかえっていました。
- ⑩ **屋内運動場（体育館）** シートを敷いたり、ジェットヒーターを準備したりして、一番はじめに避難者の方を誘導し、受け入れました。避難者の方で溢れかえっていました。ですが、寒さが厳しいので、避難者が減る度に、みなさん南校舎へ移動していました。
- ⑪ **図工室** 北校舎で最も日が当たらない場所なので、ここは開けておいた記憶があります。家庭科室の隣だから、調理する補助的な場所として使用していたように思います。
- ⑫ **児童会室** 避難所として開放しました。避難者の方が入っていました。
※ 北校舎廊下は、コンクリートの廊下なので、避

難者の方は、そこには避難させませんでした。とても寒いので移動するように声をかけました。南校舎が木の廊下なので、そちらへ誘導しました。したがって、歩くことができる通路は、1メートル程度しかありませんでした。

- ⑬ **放送室** 猪狩の家族がいました。
※ 避難所として使用した教職員は、私も含め富岡町から来た3名でした。それぞれが各避難教室のフロアに家族がいましたが、職員室で避難スタッフとして動いていました。

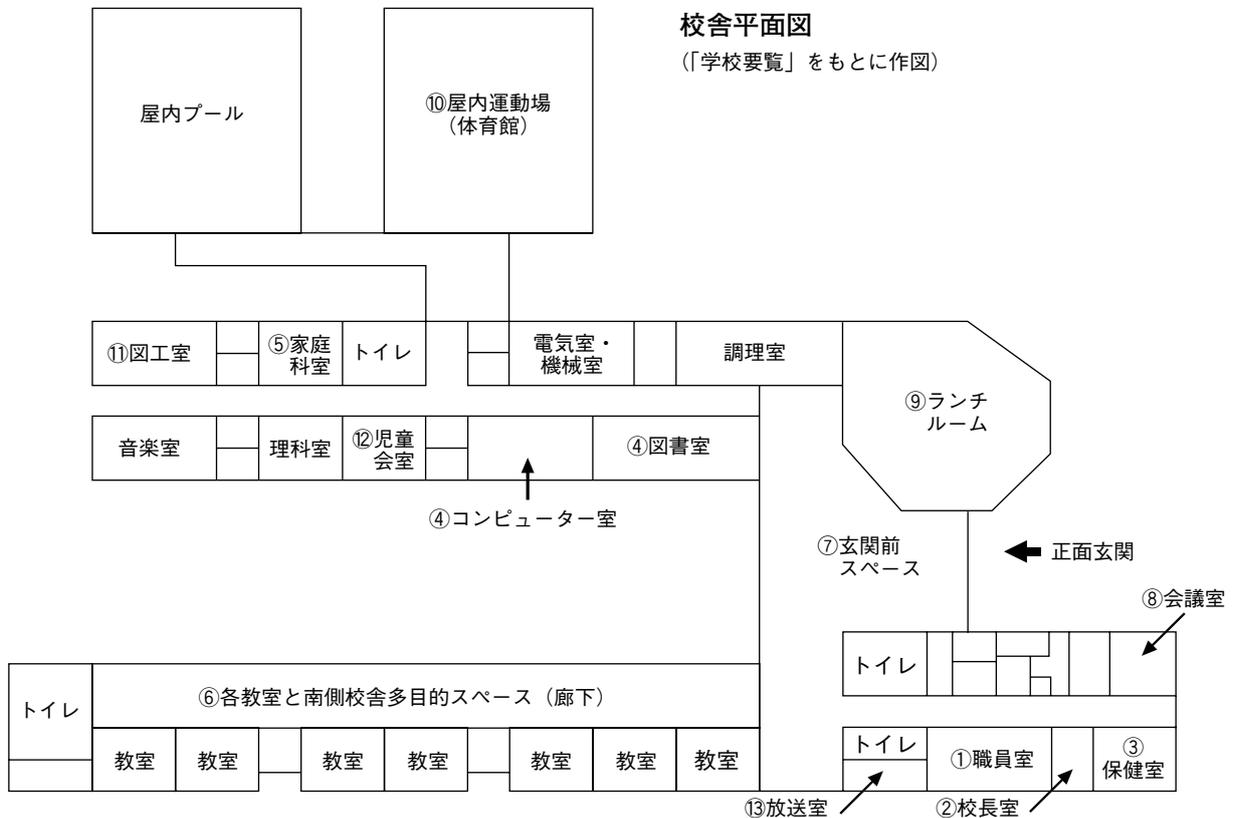
3. 教職員の状況について

猪狩氏は、次のように証言している。

基本的に双葉郡で川内村以外の町村は、停電と地震による交通網の遮断のため、身動きが取れない状態になりました。

私は、偶然にも川内村への交通網が1カ所だけ通っていたため、川内小学校へ戻ることができました。次の日、富岡町から来た2名の教職員も同様にそのルートを探して、戻ることができました。

残りの7名の教職員は、交通網の遮断と市町村の避



難指示によって、川内小学校へ戻るができなくなりました。

今、考えてみると、戻ることができた私を含めた海沿いに住む3名の富岡町民は、偶然が重なっただけかもしれません。当時、校長先生、教頭先生は川内村在住でした。残りの2名の先生のうち、1名は川内村在住、もう1名は小野町在住でした。考えてみると、海沿いの町の先生方は、自宅へ戻った時点で、川内小学校へ戻ることは不可能に近かったかもしれません。

4. 川内小学校での取り組み

3月11日

□ 客観的データ

- 午後2時46分 東日本大震災発生。
- 午後7時3分 政府が福島第一原発について原子力災害対策特別措置法に基づく「原子力緊急事態宣言」を発令。
- 午後9時23分 福島第一原発から半径3キロ以内【双葉町、大熊町の一部】の住民に避難指示。

□ 証言 長い長い避難生活の始まり

14時46分、当時、私は職員室で仕事をしていました。これから6校時の時間を利用して、卒業式の式歌の練習を体育館で行う予定でした。そのときです。今まで経験したことがない大きな揺れが始まりました。

校舎が激しく揺れています。今まで感じたこともない……の激しい揺れです。これは、ただごとではない……。私は職員室を飛び出しました。当時、私は教務主任でしたから状況を把握しようと思いました。激しい揺れが続くなか、急ぎ足で児童の教室を回りました。校長先生も状況を把握するために廊下にやってきました。

子どもたちに「大丈夫」「大丈夫」と声をかけ……

私は、子どもたちがいつでも外へ避難できるように、校庭側の扉を開けて欲しいと先生方に声をかけていきました。自分から開けに行った教室もありました。担任の先生方は、その時、とても冷静に対応していました。子どもたちを机の下に潜らせ、ずっと大きな揺れに耐えていました。あの大きな揺れです。先生方でも、きっと心の中ではそうではなかったはずだと思います。それでも、次に来るであろう避難指示に備えて、じっと耐えていました。ある先生は戸棚を必死に押さえていました。扉周辺に避難スペースを作っている先

生もいました。「大丈夫だよ。」「心配しないで。」声をかけている先生もいました。どの先生も、本当に本当に素晴らしかったです。

全ての教室を見回った後、私は、低学年の廊下周辺で待機していました。揺れは未だに収まりません。教室からは、子どもたちの泣き叫ぶ声が聞こえてきます。一体、今、何が起きているのでしょうか。私には全く想像つきませんでした。でも、この後に、校内放送で外への避難指示が必ず出る。私は、それだけは想像できたので、泣き叫ぶ低学年の子どもたちに「大丈夫。大丈夫。」と、笑顔で声をかけていました。

子どもたちは、全員避難したが……

揺れが収まりだした後、校内放送が流れ、教頭先生より避難指示が出ました。先生方の誘導に従って、子どもたちは校庭の中央に避難しました。この避難は、これまで実施していた避難訓練が生かされたスムーズな避難でした。ただし、ここは川内村です。浜通りにおいて氷点下になる寒さがとても厳しいところです。このときも、外は雪がたくさん降っていました。寒さに震えながらじっと耐えている子どもたちが本当にかわいそうでした。

程なくして教育委員会から連絡がありました。子どもたちの送迎スクールバスが、いつもより早く来るそうです。しかし、子どもたちは着の身着のまま外へ避難しています。私は、職員室で待機していた先生方と外にいる男の先生方に声をかけ、子どもたちの防寒具や帰りの用意（ランドセルや運動着入れなど）を、各教室を回って取りに行くことにしました。余震は何度も何度も来ています。怖かったです。それでも、揺れに耐えながら、先生方は子どもたちの荷物のほとんどを持ち出してくれました。

スクールバスが到着する前に、心配した保護者が数多く様子を見に来てくれました。その場合は、保護者と一緒に帰すようにしました。ようやくスクールバスも到着し、子どもたちは全員無事に帰ることができました。とりあえず、ほっとひと安心しました。でも、それからしばらくの間、子どもたちがどこに避難しているのか連絡が全く取れない状態が続くこととなります。3月下旬くらいまでです。このとき、そんなことになるとは思いませんでした。

教職員の避難。家族は無事か。

さて、職員室に戻ると、テレビには大津波警報が発令されていました。大きな大きな津波が遡上する様子

が映っていました。死者も多数出ているようです。一瞬、自分の目を疑いました。何なんだ、この状態は……。子どもたちを無事に帰せたら、今度は、自分の家族のことが気になり始めました。先生方も家族へ連絡を取ろうとしますが、連絡がなかなかつきません。つかない方がほとんどです。電話は使えなくなっていました。私も家族と全く連絡が取れませんでした。

校長先生より指示があり、まず女性の先生方が一時帰ることになりました。単独では危険なので、連なって帰るように指示されました。小さいお子さんがいる男性の先生も一緒に帰りました。私は家族のことを案じながらも、現状で、何ができるのかずっと悩んでいました。テレビで映されている震災の様子は、想像を絶する光景ばかりです。校舎内の破損状況を見に行きながら、ますます不安は募りました。それからの2時間あまりは、テレビでしか情報を知る手段はありませんでした。あのとき、実は原子力発電所が緊急事態に陥っているなんて、私は全く考えていませんでした。

家族とは、未だに連絡が取れませんでした。私は、18時頃家族に会うために一時帰宅しました。自宅は、双葉郡の富岡町夜ノ森公園付近にあります。川内村では、電気が通っていました。しかし、富岡町に入った途端、町は暗闇でした。町全体が停電になっていました。道路は至るところにひび割れや陥没しているところがありました。瓦やブロック塀が落ちている家もたくさんありました。不安ばかりが募りました。私の家族は無事でしょうか。

家族がいない。会えた！

慎重に運転しながら、ようやく自宅に到着しました。その時です。私は自分の目を疑いました。妻の車がない！慌てて自宅に入りましたが、妻はそこにいませんでした。飼っている犬もいませんでした。どこに行ったのか、全く想像できませんでした。暗闇の家の中は、地震によって家財が散乱しています。壁にはひびも入っていました。何なんだこの光景は……。これが自分の家なのか……。何回も何回も携帯電話に連絡しても、繋がりません。どうやって家族を捜そうか。私は困り果てました。

しばらくすると、私は、震災時は公共施設が避難場所になっていることを思い出しました。自分がその立場にある人間なのに、やっと思いつくことができました。急いで車に乗り込みました。片っ端から公共施設を回ろうと思いました。幸いにも一番最初に行った富岡第二中学校の校庭に妻の車がありました。良かった

……。本当に会えて良かった。妻は、犬と一緒に毛布にくるまりながら、車中でじっと恐怖に耐えていました。私に気づくと、「近所のみなさんが、私に声をかけて一緒に避難してくれた」と話してくれました。助かりました。妻に声をかけてくれたご近所のみなさんに感謝です。妻は、気丈にも「あれ、早いね？しばらく来ないかと思っていた」と私に話してくれました。こういった災害の場合、私たちは全体の奉仕者として災害スタッフにならなければならないことを、妻はちゃんと理解してくれていました。

川内小学校へ戻る

とりあえず私の車で自宅に戻ることにしました。そして、もしもの場合に備えて、準備できるものは準備することにしました。懐中電灯は、地震によってどこかに紛失してしまったので、庭につけてあるソーラーライトを持って自宅に入りました。取り出したのは、防寒具や毛布、ホッカイロ、他に犬のえさなどです。停電していたので、ブレーカーも落としました。通電されたとき、火事にならないようにと考えました。しかし、私はこの時点でも、次の日には自宅に帰って来られるだろうと思っていました。だから、持ち出したものは、寒さをしのぐ最低限のものだけでした。あれから、原発事故により帰れなくなるなんて思いもしなかったのです。

私たち家族は、しばらく自宅の駐車場にいました。私の車で暖をとり、テレビを見ていました。テレビでは、地震による被害が報道されていました。このとき、津波の被害はかなり報道されていましたが、原発事故の緊急事態は、あまり報道されてなかったように思います。このままでは車の中で一夜を過ごすこととなります。川内小学校のことも気になります。私は、家族とともに川内小学校へ戻ることにしました。21時頃です。富岡町は暗闇でしたが、川内村は幸い電気も水も通っていました。

宿直する

川内小学校に到着し、校長先生や教頭先生に富岡町の様子を報告しました。何人かの先生方も残っていました。その日の夜は、宿直として(避難者としてですが)川内小学校の保健室に泊まらせてもらいました。校長先生はじめ他の先生方は一度自宅に戻り、朝また集合することになりました。

ここは、電気が通っていて、水も出ます。たぶん海沿いの町は停電状態です。各地の避難所では、どうなっ

ているんだろうと気になりました。私の両親・祖母・妹夫婦とも全く連絡が取れない状態でしたから、心配しました。実家はとても古い家なので、この地震で倒壊している……津波も来ているかもしれない……もしかしたら……とまで考えていました。幾度とくる余震に、私も妻もほとんど眠ることができず、夜が明けました。

そして、次の日、今まで想像したことのない緊急事態が起こります。この夜、余震の恐怖に耐えながら、私は、そんな事態に陥るなんて考えてもいませんでした。

3月12日

□ 客観的データおよび他の証言

- 午前0時49分 福島第一原発1号機で原子炉格納容器内の圧力が高まったと東電が国に報告。
- 午前5時43分 1号機の中央制御室で放射線量が上昇し、避難指示区域を3キロから10キロに拡大。
- 午前6時半頃、川内村役場に富岡町長遠藤勝也から電話が入る。「原発の状況が思わしくない。避難者を受け入れてほしい。」受話器の声は切迫しており、電話を受けた総務課長の井出寿一は、すぐに遠藤雄幸に連絡した。「ただごとではない」。村長は、災害対策本部会議で村内の20施設を開放することを決めた。

井出茂氏の証言⁷ 「〔(災害対策本部会議で)12日の午後から富岡町民を受け入れますので、各施設で受け入れ体制を整えてください』と言われた。井出によると、「村の災害対策本部には衛星電話が一台あるが、その衛星電話も大して役に立たなかった。県庁とか国に問い合わせをしても、「わかりました。検討してみます。」って言ったきり返事が来ない。NTTにも何度も修理を要請するんですが、30キロ圏内には入るなという指示を社内を出されているもんですから、来ない。／物流も、途絶えた。12日の日から通信回線がまったく使えなくなって《僕たちのこの地域は捨てられていた。僕だけじゃなくて多くの人がそう思ったはずです。》

- 午前7時40分 福島第二原発の1, 2, 4号機が冷却機能を失い、東電が国に緊急事態を通報したことが判明。
- 午後2時過ぎ 福島第一原発1号機の周辺で放射性物質のセシウムが検出されたことが判明。炉心

溶融が起きたことを確認。

- 午後3時46分 福島第一原発1号機で水素爆発。東電社員ら4人がけが。
- 午後7時4分 官邸の指示で福島第一原発の避難指示の範囲を半径20キロ以内に拡大したと県【川内村の一部が範囲に入る】。東電は1号機に海水注入。
- 川内村の小・中学校や地区集会所などには富岡町から避難者が殺到⁸。約3,000人の人口は、約9,000人に膨れ上がった。村は防災無線で村民からボランティアを募り、コメの提供も呼び掛けた。午後には受け入れが限界に達した。

□ 証言 約2,200名の避難者、学校はパニックになる不安ばかりの夜が明けました。朝6時ごろです。私は、保健室から外の空気を吸いに出ました。その時、川内村役場の方が車で見えられました。役場の方からは、「富岡町から原発事故によりたくさんの避難者が来ます。小学校でも体育館に避難者を受け入れることになります。」という話を聞きました。「何名くらいですか?」「約300名です。」「え?」正直、驚きました。そんな人数、果たして受け入れられるのだろうかと思いました。

避難者受け入れの準備

妻に事情を説明し、私は一人体育館に急ぎました。鍵を開け、シートを敷く準備を始めました。川内村役場の方も2名来ました。校長先生、教頭先生、当時は避難区域になっていない2名の先生も集まりました。みんなで体育館の床にシートを敷き、寒さに備え暖房器具も準備しました。体育館玄関前には、受付場所を設置しました。その後、男の先生と2人で外に出て、車の誘導を始めることにしました。とても緊張します。こんなに受け入れられるのでしょうか?大丈夫なんのでしょうか?

でも、川内村消防団の方がたくさん応援に駆けつけてくれました。もちろん本校の保護者の方も多数います。「先生、ここいらは俺らがやるから、先生らは中さ入って、そっちの対応してくれ。俺らじゃ、中のことはわかんないからよろしく頼む。」本当に心強かったです。

避難者受け入れ開始

私は中に戻りました。そして、体育館玄関で避難者の受付と誘導を始めました。この時点で、川内小学校

スタッフは5名しかいませんでした。双葉郡内沿岸部は、政府からの避難指示により、先生方もあちこちへ避難せざる得ない状況だったのです。みんな学校に戻りたくても、戻れない状況になっていました。私は、こんな人数で対応できるのだろうか、不安に思いました。

もっともっと避難者が来るぞ！

車は次々に入ってきました。受付では、全ての方に氏名・連絡先・どこから来たかについて書いてもらいました。みなさん様に疲れた表情をしていました。無理ありません。昨夜は、どこかの体育館や公民館などで、寒さに耐えながら不安な一夜を過ごしたのです。当初、避難者の受け入れは300名と聞いていました。でも、人の波は途絶えることはありませんでした。次々に人が入ってきました。受付前は、見たこともないくらい長い長蛇の列ができてしまいました。

教頭先生が走ってやって来ました。「もっと、もっと避難者が来るぞ！これから、全ての教室、廊下を開放する。お年寄りや体の不自由な人は、暖房設備の整った教室へ誘導して欲しい。特に赤ちゃんがいる方は保健室へ移動させて欲しい」正直、驚きました。一体どのくらい来るのだろうか？全く予想が付きませんでした。それでも、私たちは必死になって受付し、各場所に誘導しました。校長先生・教頭先生は、何度も何度も放送を入れて、本校の避難場所について説明をしていました。

2,200名に膨れ上がる

避難者の中には、並ぶのに疲れ果てたのでしょうか、受付名簿の記入は面倒だと書こうとしない方もいました。自分の家族を、名簿で捜して欲しいとお願いしてくる方もいました。犬を連れてきたから、どこに置けばよいか尋ねてくる方もいました。いろいろなことを矢継ぎ早に聞かれ、対応を求められました。でも、ここには、私を含め、3名のスタッフしかいません。名簿を確認して家族がここに来ているか、避難者の方と一緒に探してあげたくても、人の波は途絶えません。できないんです。やってあげたくても、やってあげられないんです。この人数で、何百という避難者の対応は、もうとっくに限界を超えていました。何とかしてあげたい。何度も私たちは、職員室に走っては戻り、教頭先生に頼んで校内放送で探して欲しい方を呼び出してもらいました。それだって、わずかな時間をかいくぐっての対応です。残念ながら、対応してあげられ

ないことの方が、たくさんありました。

そう思っていた頃、本校の先生が2名、ここへ避難してきました。村の方の話では、「避難者は順番に回す」と聞いていました。2名の先生方は、事態を予想して、まっすぐ川内小へ向かってくれました。本当に助かりました。私たちは、限界近くまで達していたので、気持ちにゆとりがなくなっていました。避難者の方へ丁寧な対応ができなくなっているところでした。これで本校のスタッフは7名になりました。2名増えただけで、これほど心強いと思ったことは、今までありませんでした。ようやく富岡町役場の方も来てくれました。受付にも数名お手伝いが来ました。ようやく避難者の受付、誘導がスムーズになりました。しかし、受け付けても受け付けても、避難者は増え続けました。後からわかったのですが、川内小学校だけでも約2,200名の避難者を受け入れたそうです。村の人口は約3,000名ですから、その数字のすごさは予想できると思います。

避難所運営始まる

午後になり、避難者の受け入れも落ち着き出しました。富岡町役場の方が見えられたので、共同で避難所の運営をすることになりました。富岡消防署川内分署の方も応援に来てくれました。これで、ここ川内小学校には、富岡町役場（10名程度）・川内小学校教職員（7名）・富岡消防署川内分署（1名）の共同スタッフが集まりました。少しずつですが、体制は整いつつありました。肩の荷が少しだけおりました。その時の私は、受付場所で対応したり、職員室で対応したりと、あちこちを飛び回っていました。学校の施設について知っているのは本校のスタッフだけです。各教室にゴミ袋を設置したり、トイレトーパーを補充したり、校内放送の呼び出しをしたり、いろいろなことをしていました。

避難者家族の安否確認

避難者のみなさんは、自分の家族や友人が現在どうしているのか一番不安に思っているようでした。私たちは、受付名簿や川内村の各避難場所などをコピーして貼り出すことにしました。避難者の方たちの不安を少しでもやわらげてあげたいと思いました。また、唯一使える公衆電話や職員室の固定電話も使用していただくことにしました。携帯電話の充電器がない方には、校内放送で充電器をお貸しできる方を探しました。ちなみに、この時点でも、私の両親たちの行方は全くわ

かりませんでした。後から来た本校の先生に「勝人先生の実家は大丈夫なようでしたよ」と言われていたので、たぶん……生きているはず……そう思っていました。

避難者で溢れかえる

学校中に避難者が溢れかえっています。使える全ての場所は開放したので、もう空いているスペースは見あたりません。歩く通路はせいぜい1メートル程度です。すごい光景でした。みなさんとても不安そうな様子でした。私も不安でしたが、今はこの状況を維持していくこと、避難者の負担が少しでもやわらげる努力をすることだけを考えるようにしました。さいわいにも川内小学校は、廊下に暖房設備があります。寒さだけなら何とかしのぐことができます。でも、これから来る寒い夜を迎えるに当たって、不安はよぎりました。

実は、この時点で救援物資は何も届いていません。みなさん、自分で持ってきた毛布にくるまって暖をとっています。何もない方もいます。食料だってありません。たぶん、昨日から何も口にしていない方が多数いたと思います。何よりも毛布や食料が必要です。そう思っていた矢先、少しずつですが、救援物資が届けられてきました。両役場の方が手配してくれました。この時点で、政府や県からの支援はなかったように思えます。各自治体がそれぞれの判断で必死になって手配していました。

救援物資がまったく足りない

まずは、届けられた水を体育館玄関前で配布しました。数に限りがあるので、一本ずつ配りました。もっと欲しいと言われる方には、「すみません。数に限りがあるからご理解ください」としか言えませんでした。何回も並ぶ方もいました。きっと家族が多かったのでしょう。私はそのことに気づいてはいましたが、「もらいましたよね」とは言えませんでした。どうしようもなくなり、途中から、川内小学校の水道水は井戸水なので、そちらを空いたペットボトルに入れて使ってくださいとお願いすることにしました。

この頃になると、避難者の方でも自主的にボランティアをしてくれる人が出てきました。知り合いの先生は、受付のお手伝いをしてくれました。本当に助かりました。そういったボランティアの方と相談しながら体育館玄関前で水の配布をしました。水が入っていた段ボールは、避難者の方が床に敷くためでしょう。次々に持って行きました。このような状況に陥った中で、

ボランティアが自然発生的に生まれてくれたことに本当に感謝しました。自分たちだって、同じ避難者のはずです。苦しいはず。不安なはず。それなのに手伝っていただいたことに、心から感謝しました。

2,200名に対して300食

正午頃、体育館玄関前では、川内村婦人会の方が炊き出しをしてくれました。豚汁とおにぎりです。おいしそうな匂いがします。校内放送が入ると、玄関前には長蛇の列ができました。でも、ここで問題が発生します。用意されていた食事は、約300名分しかありません。ここには約2,200名の避難者がいます。どうしても数が足りません。はじめからわかっていたので、ボランティアの方とどのような形で避難者へ食事を提供するか相談しました。出した結論は、並んだ人一人に対しておにぎり一個と豚汁一杯のみです。厳しい決断です。たくさんの方に食事を少しでも行き渡らせたから、そうするしか方法がありませんでした。

私たちは、何度も何度も罵声を浴びました。しかし、言われて当然だと思いました。みなさん、もうとっくに空腹の状態です。寝たきりの老人はもらえないのか！家族がたくさんいるのにこれじゃ足りないだろ！せっかく早くから並んでいたのになんなんだ！もっと酷いことも言われました。でも、「すみません。たくさんの方に食事を届けたいんです。がまんしてくれませんか。」何度も何度も頭を下げ謝りました。時には、「我慢してください！私だって同じように避難してきたんです。家族の行方さえわからないんです！がんばりましょうよ！」と声を荒げてしまいそうになったこともありました。そのたびに何度も何度も心の中で「冷静に……冷静に……」と問いかけました。何だか自分の器が試されているような気がしてなりません。そんな中でも、「大丈夫だよ。みんな大変なんだから我慢するね。」そういつてくれる避難者の方もいました。涙が出るくらいうれしかったです。

度重なる苦情 ― もう限界

でも、体育館玄関前はパニック状態に陥っていました。別な場所では、川内村の方が公民館などで一生懸命炊き出しをして食事の準備をしています。でも、間に合わないんです。当たり前です。川内村に避難してきた数は、川内村の人口をとっくに超えていたんです。何度も何度も炊き出しが行われます。そのたびに校内放送が入ります。長蛇の列ができます。炊き出しが来る前から、ずっと並んでいる人だってたくさんいます。

そういった状況の中でも、食事数は足りません。全然足りません。食べたくても、ここに並べず食事をとれない方もいます。炊き出しをしている川内村の方も、数が足りずに何度も苦情を言われ、悲しくて涙を流している方もいます。もう限界です。心が折れてしまいそうです。私たちはある決断をします。

備蓄食料に手をつける

ここには、救援物資として水以外にも「水で作れるおかゆ」という備蓄食料が届いていました。数は約200です。これを食事を取りに行けない、体の不自由な方やお年寄りに何とかして配れないものかと考えました。この食料は、もしもの場合に備えた最後の手段として考えていましたから、決断するには覚悟が必要でした。校長先生・教頭先生に事情を説明し、許可を得ました。しかし、数はたった200のみです。数名のボランティアスタッフだけでは、体の不自由な方やお年寄りの方に確実に配ることは難しいと考えました。そこで、校内放送でたくさんのボランティアを募ることにしました。

私は校内放送を入れました。「本校のボランティアスタッフです。ご不便をおかけして申し訳ありません。現在、川内小学校避難所は、数名のボランティアスタッフが中心となって運営されています。しかし、スタッフの数が足りず、現在、運営が困難な状態になっています。そこで、みなさまにお願いがございます。只今より、ボランティアをしてくださる方を募集したいと思います。ご協力していただける方は、体育館玄関前にお集まりください。よろしく申し上げます。ご不便をおかけして申し訳ございません。」何度も同じ内容を繰り返し放送しました。そして、私は体育館玄関前に行きました。

ボランティア集まる

体育館玄関前には、たくさんの人が集まっていました。その光景に、正直目を疑いました。老若男女を問わず、約30名以上の方が集まってくれました。これなら、何とかなるかもしれない……。避難所を開設してから、初めてそう思った瞬間です。ここで、私は、本校のスタッフ及び炊き出しや水の配布をしていただいたボランティアの方と事前に打ち合わせをしていた案をみなさんに提案しました。

「お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。みなさんにご協力していただけるだけで、本当に助かります。よろしく申し上げます。ここに約

200のおかゆがあります。このおかゆは水でも食べられます。このおかゆをみなさんに手分けしてもらい、体の不自由な方やお年寄りの方、つまり、この炊き出し所に自分では来られない方に配って欲しいんです。ただし、一度食事をされたような方は除いてください。私たちは、できるだけ数多くの方々に食べていただきたいんです。」みなさん、その趣旨に賛同してくれました。「そこで、みなさんお一人一人に、5個ずつこのおかゆをお渡しします。すみませんが、これをみなさんお一人お一人が各場所を巡回していただきながら、おかゆを必要としている方だけに渡して欲しいんです。大変な作業になるかと思えます。苦情を言われるかもしれません。ですが、先ほどの趣旨をご説明してください。そして、理解してもらってください。ご協力よろしくお願いします。」

誰かのために生きる

ボランティアの方の胸にガムテープを貼り、「ボランティア」と書いてもらいました。みなさん、自分たちから進んで回る場所を話し合ってくれました。おかゆの数は、たった200です。慎重に配る必要がありました。体育館を回る方・図書室を回る方・6年教室を回る方……、もれなく、まんべんなく回れるように話し合いは続きました。私は、みなさんそれぞれが強い意志を持って参加しているように感じました。「わかったから、そういう人たちに配るんだね」「はい。他の人から何か言われるかもしれません。すみません。」「大丈夫だから、ちゃんとやるから。」人は苦境に立ったとき、人としての価値が問われると思いました。ここでこんなに苦しい避難生活を強いられていても、誰かのために生きられることができるんだと強く思いました。

ボランティアの方は、自分が配る分のおかゆを5個持って、それぞれに分かれました。それぞれが強い意志を持って、おかゆを配って歩いてくれました。本当に助かりました。そして、ここから自然的にたくさんのボランティアが生まれてきました。避難所の運営も、何とかなるかもしれないと思い始めました。

1号機水素爆発

しかし、このとき、あの福島第一原子力発電所の1号機建屋で水素爆発が起こります。ようやく落ち着いた川内小学校が、またパニックに陥ることになります。

テレビ局のアナウンサーが、何回も何回も何かを訴えていました。耳を傾けてみると、1号機建屋で水素爆発が起こったようです。職員室のテレビにスタッフが集まり、みんなで固唾をのんで、その報道を見ました。これは一体どういうことでしょうか？今、何が起きたのでしょうか？なぜ、1号機建屋は爆発したのでしょうか？私たちが予想だにできなかった事態です。勿論、原子力発電所が、震災の被害を大きく受けていることはわかっていましたし、そのために避難指示も出ていました。だから、今こうやって避難所が開設されています。しかし、当時の政府は、「直ちに健康に被害を与えるものではない」と記者会見で言っていました。そう言っているのですから、たぶん大丈夫だろうと、内心思っていました。原子力発電は安全だと、私は、子どもの頃からずっと教えられてきました。たぶん、原発立地町の住民は、すべからくそのように教えられていたはずです。このとき、同じくらいのタイミングで、今度は、富岡町役場の方にも情報が入ってきました。

爆発は事実でした。紛れもない事実でした。川内小学校避難所では、避難者の方が思い思いに教室のテレビを見ていましたから、その情報は瞬時に伝わりました。ですが、全ての方がこの情報を共有できているわけではありません。避難者は校舎中にいます。テレビが置いていない場所もあります。外にいる人もいます。この情報を伝えなければ……。校長先生と役場の方が話し合いをし、校内放送によって1号機建屋水素爆発の事実が放送されました。

職員室、騒然

青ざめた顔で建屋爆発について聞きに来る方が職員室に増えました。「一体、どういうこと？」って聞かれました。私たちが答えようがありません。「わかりません。でも、事実のようです。」「ここにいても大丈夫なのか。」「すみません。わかりません。」そんな返答くらいしかできません。大変な事態になってきました。もしかしたら、ここにも放射能が降ってくるかもしれない。川内小学校は、福島第一原子力発電所より約22キロの場所にあります。放射能汚染の被害は、距離的に十分に考えられます。ですが、ここには現在もたくさんの避難者がいます。現状では、全員で避難する手段も方法も見つかりません。政府や県からの支援は、まだ何も来ていません。私たちだけの判断に委ねられることになります。職員室は、騒然となりました。「どうする？どうする？」役場の代表の方も困惑

してしまっています。私は、今だかつてこのような事態を経験したことはありませんでした。

安定ヨウ素剤を配布

いよいよ甲状腺被ばくを防ぐために、安定ヨウ素剤を配布すべきかどうかの協議になりました。被ばくを防ぐための、最後の切り札です。町役場の保健師さんが、県や国に何度も何度も問い合わせしていました。ところが、どこからも明確な回答は得られませんでした。結局、自治体の判断で安定ヨウ素剤を配布することになりました。放送を入れると、体育館通路前には長蛇の列ができました。保健師さんは、一人一人に説明しながら必死になって安定ヨウ素剤を配っていました。ただ、これを飲んだとしても、どのような効果が得られるかは、誰もわかりません。しかもヨウ素剤には、副作用もあるみたいです。私には、いちかばちかのかけようにしか見えませんでした。でも、それでも飲むしかありませんでした。よくわかりませんが、現状ではこれがベストの選択でした。しかし、安定ヨウ素剤の効果は24時間だそうで、それ以上は効果は持続しないとのことです。しかも、安定ヨウ素剤は一人一つのみです。つまり、もう一度何かあったら、間違いなくアウトです。だから最後の切り札です。口に入れた瞬間、私は恐怖を覚えました。でも、このやりとりで納得いかないこともありました。安定ヨウ素剤は、40歳以上の方には配布されませんでした。わたしにはよくわかりませんが、安定ヨウ素剤は40歳以上の方には効果は得られないそうです。なんだか、人間の尊厳が差別されているような感じがして、私はとても嫌な気持ちになりました。

川内村民から毛布と食料届く

まもなく夕方を迎えます。川内村の氷点下の世界が近づいてきます。この時点でも、川内小避難所で問題になっていたのは、食料と毛布でした。寒さと飢えをしのぐ方法を見つけることが、最重要課題でした。

そのときです。なんと、村の村内放送が流れました。川内村では、全村民に毛布と食料の支援をお願いしたのです。これには驚きました。村内放送が何度も何度も流れ、支援を呼びかけました。この状況の中において、川内村がこのような行動に出たことに、私はとても感動しました。村の方々だって、今、大変な状況にいるはずなんです。それなのに、誰かのために必死になって動こうとしてくれています。簡単にはできないことだと思えます。人は窮地に追い込まれても、人と

しての尊厳を失わず、行動することができる。すごいことです。

感謝の言葉

ほどなくして、たくさんの毛布、米・野菜などの食料が次々に届けられました。「先生、これ持ってきたから、みんなさ配ってない（配ってね）！」保護者の方が次々に現れ、支援物資を届けてくれました。「いいんですか。こんなにたくさんお借りして。」「いいから。いいから。みんなさ使ってやって。」みなさん、口々にそう言ってくれました。嬉しい！本当に嬉しい！村は……人なり、川内村をこよなく愛した〈かえるの詩人〉草野心平さんが遺した言葉を、私は思い出しました。私は、川内村の教員であることをとても誇りに思っていました。

校内放送を何度も流しました。毛布が届けられたことを何度も何度も放送しました。川内村の方々の温かい気持ちが避難者のみなさんに伝わるように心を込めて放送をしました。このときの放送ほど、嬉しかったことはありませんでした。避難者のみなさんも、毛布を受け取りながら、口々に感謝の言葉を言ってくれました。ここでは、毛布を奪い合うようなやりとりは、一度もありませんでした。みなさんそれぞれの置かれている避難環境の中で判断してくれました。「ああ、大丈夫。大丈夫。こちらは一枚で十分だから、ない人にあげてね。」そんな言葉もたくさんいただきました。避難者の方、それぞれが誰かのためを思って考えて行動しようとする……そんな人が増えたように思えました。

避難生活に一筋の光。暗転。

夜になっても、支援物資は次々届けられました。寒さを避難者のみなさんがしのげる。それだけで、私は満ち足りた気持ちになりました。食料もどんどん届けられました。明日からは、この食料を使って避難者自身が自炊する計画も出てきました。飢えだって何とかなる。避難生活に一筋の光が見えた夜でした。

それなのに……このとき福島第一原発は、すでに大変危険な状態になっていました。私たちには、この危険な状態を意識することは、全くできていませんでした。

3月13日

□ 客観的データ なし

□ 証言 避難者の絆、支え合い・助け合い

夜が明けました。2,200名の避難者のみなさんを受け入れた初めての夜でした。外には雪が積もっていました。やっぱり氷点下の世界になってしまいました。昨晚、私と家族は川内村在中の先生のご厚意で、その先生の自宅に泊めさせていただきました。川内村の村民のみなさんだって、大変な状況にあります。それなのにいろいろとご準備していただきました。そのことがとても嬉しかったです。感謝の気持ちでいっぱいです。

川内小学校へ再び戻る

朝、川内小学校へ戻りました。校庭に駐車している車の台数が減っていました。きっと、みなさんどこかへ避難したんだと、私は思いました。当たり前です。1号機建屋が水素爆発したのですから……。状況だっでよく分からないんです。でも、私たちスタッフには、まだまだ対応しなければならないたくさんの避難者の方がいます。

暖房はもちそう

寒さをしのぐ毛布の数は、昨晚、村民の方のご厚意で何とかなりました。支援物資としての毛布もようやく届きましたので、数は足りました。これで、寒さは何とかしのげそうです。暖房器具の燃料についても、村民の方が手配をつけてくれることになりました。燃料を微調整しながら使用すれば、あと数日は持ちそうです。この点については、とても安心しました。

問題は食事

昨日は、提供できる食事がほとんどありませんでしたから、大変なパニックになりました。何らかの策を講じる必要がありました。空腹でいらっしゃる避難者の方はたくさんいます。そこで、昨晚、村民の方からいただいた支援物資をボランティアで調理して食事を作る案が出ました。ありがたいことに米や野菜はたくさん届けられています。空腹を少しでもしのげる量はあります。おにぎりや汁物を作ることは十分可能です。ただし、本校の家庭科室の調理器具だけでは、たくさんの避難者の方に提供できる十分な量を作ることはできません。ですから、両役場の方が調理器具を調達してくださいました。一度に食事が作れる大きな鍋など、たくさんの調理器具が届けられました。

いよいよボランティアを募り、食事の準備が始まりました。ここでは、女性の方がたくさん集まってくだ

さいました。サポートしてくださる男性の方も集まりました。昨日からたくさんのボランティアができましたので、みなさん協力して食事の準備が始まりました。校舎の中庭には、テントが設営され、そこで食事の準備が行われました。この場所は、毎年、秋になると本校の児童が芋煮会をしていた所です。みなさん大変な状況に置かれているのに、一生懸命食事の準備をしてくださっている光景がとても嬉しかったです。

別な場所では、できあがった食事をどのように各教室・廊下・特別教室・体育館などに配当するか協議を始めました。うまく配当できなければ、また、ここでも昨日のようなパニックが起こります。そこで、各教室ごとに放送を入れ、順番に食事を配ることになりました。不公平感がないように、昼食と夕食で配当する順番を入れ替えるようにもしました。

あたたかい汁とおにぎり一つ

できたてです。湯気が出ています。おいしそうです。食事を提供しているボランティアの方、食事をもっている方、みなさんの笑顔が何とも素敵でした。私も食べましたが、今まで食べたことがないくらい絶品の味がしました。「ああ、生きている」という思いを実感しました。少量ではありましたが、空腹だけじゃない何かを満たされたような気がしました。たぶん、それは、はじめは混乱状態だった川内小避難所がたくさんの方々の支援により、どうにかこうにか軌道に乗りだした安堵感と、たくさんの方々が力を合わせ、この困難な状況を乗り越えようと動き出したことによる嬉しさなどの、様々な感情が混ざり合った感覚でした。

食事は大切でした。避難者のみなさんの表情も少しだけ和らいだような気がしました。この頃になると、避難指示区域に入っていない船引町などに買い物に行かれる方もいました。みなさん着の身着のまま避難されていたので、衣類や食料などを買って来る方もいました。原発の状況は、まだまだ何も見えない状態でしたから、どこかへ避難するというには決断しづらい状況だったと思います。政府は、「直ちに健康に被害を与えるものではない」と言っていましたから、それを信じるしかありませんでした。きっと、行く当てのない方もたくさんいたと思います。ガソリンもない状態でしたから、移動のために取っておく方もいたと思います。それでも、少し少しずつですが……車の台数は減っていききました。校庭に置かれていた車の台数が、時間が経つにつれ少しずつ減っていく光景に、私は何だか得体の知れない恐怖を覚えています。

た。国は「まだ大丈夫」と言っているけど、きっと、何かはどこかで起きている。そう思っていました。でも、今は目の前の職務をこなしていこうと思っていました。

診療、不安相談、不満、苦情

川内小避難所では、実は、他にも問題がありました。それは、持病をもたれている方の対応です。川内村にある唯一の診療所は、常にたくさんの病人の方が診療を受けていました。そこへ役場が手配したマイクロバスで治療へ行く方もいました。避難所には、明日にはインスリンを打たないと危険な方もたくさんいましたから、役場の方が四方へ電話をして対応していました。そういった明日への不安がある方が、たくさんいました。また、心身の不安が募り、職員室に何度も何度も相談に来る方もいらっしゃいました。現在の事態が飲み込めずにいる方がたくさんいましたから、避難所スタッフは、それぞれの方の話を聞き、相談に乗ることが多くなりました。時には、不満や苦情を言われる方もいましたので、慎重な対応が必要でした。私たちスタッフを含め、避難をしている人間は誰もがたくさんの方の不安を抱えています。話を聞き、共感的に受け止める努力をしました。

しかし、この対応は、本当に難しかったです。何か神様に自分の中の人間としての器を試されているかのようでした。私も避難している身ですから、避難されている方の気持ちはよく分かります。分かるように努力もしました。だから、もめている所に出向き、話を聞くこともしました。冷静でいられることが、こんなに大変なことなのかと、痛感しました。でも、ここで一番学んだのは、富岡消防署川内分署から派遣されていた消防士の方の真摯な対応でした。みなさん一人一人の話をじっくり聴き、笑顔でこたえていました。実は、その消防士は、私の高校の同級生でしたから、彼のそういった思いやりのある真摯な対応を見て、我が身のことをたくさん振り返りました。彼は、原発の現場にも出動しています。もっともっと危険な目にも遭っています。ですが、そんなことは微塵にも感じさせない心のこもった対応に、私は感銘を受けました。そして、自分もそのような対応をしなければと、肝に銘じました。

各所の避難者名簿の作成

他にも、誰がどの避難所に避難しているか、名簿を使って探す作業も増えました。避難者の方は、自分の

身内や仲間がどこに避難しているか分からずに不安な時を過ごしています。たくさんいらっしゃいます。中には、各避難場所を歩いて探す方もいました。この頃になると、川内村に避難している方の避難者名簿は、両役場の方のご尽力により、何とか形になるものとしてできてきました。その名簿を何部かコピーし、職員室前にコーナーを設けました。そこで自由に見てもらうようにしました。自分では探すのが分からない方には、一緒に探してあげるようにもしました。

私も両親たちの行方が心配でしたから、その名簿で家族の行き先を見つけることができました。やっと自分の両親たちの無事を確認しました。ですが、会いに行くことはしませんでした。私は避難所スタッフでしたから、こちらの方の対応が今すべきことと考えていたからです。実は、後から分かったのですが、両親は、地震の際に逃げた時に、家の瓦が父の頭部に直撃し、意識不明になっていたそうです。母も父を救出しようとした時に、右手に大きな傷（後に骨折していたことが判明しました）を負っていたそうです。どちらも血だらけのまま不安な一夜を過ごし、そして、川内村へ避難していたそうです。高齢の祖母は無事でしたが、慣れない避難生活に身も心も疲れ果てていたそうです。この時、自分がそこに行けば、両親たちの不安を何とかして取り除いてあげられたかもしれません。自分が早く気づいてあげれば、もう少し別な対応ができていたかもしれません。このことは、未だに悔やまれます。

村は人なり

川内村の方は本当に親切な方たちばかりです。毛布や食料の支援以外にも様々な支援をいただきました。避難者の方には、赤ちゃんと一緒に来ている方もいました。近所の方が、そういった方に自宅でお風呂に入れてくれたり、紙おむつを持ってきてくれたりする方もいました。ミルクを届けてくださる方もいました。みなさんが、それぞれ思い思いに考えていたことをしてくださいました。川内小学校の保護者の方も、PTA会長さんをはじめ、たくさんの方が心配して様子を見に来てくれました。何か手伝うことはないかと申し出てくださいました。「村は人なり」です。人間の暖かさを、私はかみしめることができました。

他県から救援物資乗せて

実は、他県からも、現状を憂い、自動車でも時間も何時間もかけ、支援物資を個人で届けてくださった方

もいました。「私は、阪神大震災でたくさんの方の支援をいただきました。ですから、その恩返しをしたいと思ってやってきました。これを使ってください。」そう言って、赤ちゃん用の紙おむつやミルクを渡し、またすぐに帰って行かれました。ここは、原発が危険な状態にある場所です。それなのに、私たちの現状を思い、そして、来てくださいました。私は、嬉しさのあまり、涙が出てしまいました。だって、ここには政府の支援も来ない危険な場所なんです。現に、本来は災害救助に来てくれる自衛隊ですら、素通りしてしまう地域なんです。私が記憶するに、川内小避難所に来てくれた自衛隊の方は3名でした。それも現状を見に来た程度でしょうか？すぐに帰って行かれました。今は、たくさんの方の地域が被災し、救援が必要でしたから、仕方がないといえばそうなんです。私は怒りを覚えていました。

だから、村民の方や支援物資を届けてくださる方のそのやさしさに心を打たれました。人は、誰かが本当に困っているとき、そのとき、どう動くべきかを考え、そして、どのような行動を実際に起こすか、それが一番大事なんじゃないかと思いました。

3月14日

□ 客観的データおよび他の証言

- 午前11時1分 福島第一原発3号機で水素爆発。経済産業省原子力安全・保安院は半径20キロの住民らに屋内退避を呼び掛け。
- 午後7時55分頃 福島第一原発2号機で燃料が水面から完全に露出し、原子炉が空だき状態になったと東電が公表。
- 井出茂氏の証言 13日まで上空をヘリが飛んでたんですが、14日になったら報道関係のヘリもいっさい飛ばなくなった。《だからその状況を見たときに、ああ僕らは捨てられたって思いました。》国からの指示もない、県からの指示もない。そういう中で、何の情報もなく僕たちは一方的に流れてくるテレビの映像でしか判断できない。そうした状況に置かれて、焦りというか、なんて言うんでしょうね、ここから出なくちゃいけないんだという思いが強くなっていきました。

14日の日に災害対策本部〔川内村と富岡町の合同〕で川内村の遠藤雄幸村長が、会議を開いたんです。15日には避難しよう。すると、ちょっと待ってと、そこにいた富岡の遠藤勝也町長が原子

力安全・保安院に衛星電話を使って電話したんですよ。じつはこの話はどこにも報道されなかったと思いますけれども、原子力安全・保安院のナンバー2が「絶対、原子力発電所は安全だ」「だから大丈夫だ」と言って、一度、15日の避難をおもいとどまったんです。／衛星電話を通じて「絶対安全だ」と。

□ 証言 3号機建屋が爆発する。「もう、ダメかもしれない。」

運命の日が来ました。

私たちの恐れていたことが、悲しいことに……現実のこととなってしまった日です。そうです。あれは、忘れもしない午前11時1分です。福島第一原子力発電所3号機建屋が水素爆発を起こしました。その映像がリアルタイムで、私たちの目に飛び込んできました。

体を休めるようになるが……

その日の朝は、とてもすがすがしい朝でした。川内小避難所には、まだまだたくさんの避難者の方がいましたが、避難所の運営は、何とかうまくいっていました。みなさんが力を合わせたからこそ、ここまでの状態までたどり着きました。この状態を維持できるなら、あと数日は何とかかなりそうだと思っていました。

当時、私は、川内小の放送室をお借りし、妻と愛犬とで寝泊まりをしていました。校長先生は、私たち7名の教職員を昼間の勤務と夜の勤務に分け、私たちの負担を減らす体制にしてくださいました。昨夜には、避難所開設以来、はじめての打ち合わせをすることもできました。体制が整えられたことにより、幾分、体を休めることができそうです。ここまで、眠りたくてもほとんど眠れない状態に対応していることが多かったです。私たちは、常に交代で仮眠をし、避難者の方の対応をしていました。13日の夜、私は夜勤でしたから、14日の昼間は体を休め、その日の夜に備えるはずでした。

3号機水素爆発

しかし……午前11時1分、福島第一原子力発電所3号機建屋が水素爆発を起こしました。その映像はリアルタイムで、私たちの目に飛び込んできました。このことを、最初に私に教えてくれたのは、妻でした。「大変なことになっている。」そう言われ、私はテレビの映像を見ました。爆発の瞬間が、何度何度も放映され

ます。体が凍り付きました。背筋がぞっとしました。

ここは、原発まで22キロの所です。放射能汚染の可能性は十分にある所です。現にこの爆発の後、村内放送による各地点の放射線の値が跳ね上がったと聞きました。何十倍にもなったそうです。何度も何度も同じ映像が繰り返されます。私たちは、それぞれが思い思いのことを口にせず、ただ黙って見るしかありませんでした。「危ない……。」誰かがそう言うてしまうと、たちまち、ここが混乱状態に陥ってしまうからです。

妻は身の危険をととても感じたそうです。私は避難所スタッフとして動いていましたから、テレビ等で情報を得ることはあまりできていませんでした。むしろ、妻の方が身の危険がすぐそこまで来ていると実感したそうです。

でも、私たちには、どうすることも実はできませんでした。ここには、他の場所に避難したくてもできないたくさんの避難者の方がいます。爆発の映像は、みなさん見られているはずです。職員室に状況を訪ねてくる方もいました。しかし、政府の発表は、曖昧でした。この時点で、何をどう信じていいか分かりません。ただ、危険な予感だけは十分にありました。それは、12日に1号機建屋が爆発した時以上のものでした。

校庭に駐車していた車の台数が一気に……一気に減っていきました。みなさん、同じことを考えていました。このままでは……危ないと……。

不安を分かち合うことしか……

この時点で両役場の方の動きは忙しくなりました。きっと様々な状況に備えて対応についての対策を練っていたんだと思います。しかし、ここ川内村には、村民の方と双葉郡内から避難したたくさんの避難者の方がいます。想像するに、とても緊迫した対応を迫られていたんだと思います。

私たち川内小教職員スタッフは、それでも避難者の方の対応をすることにしました。今、何かを騒いでいても、どうすることもできません。だとしたら、今、目の前にいて、身の危険を感じながら不安を抱えている避難者の方とともに、不安を分かち合って励まし合おうと思いました。私は、「まだまだ大丈夫だ」と、自分に言い聞かせました。不安なことを口にしたら、それに負けてしまいそうな気がしたからです。それから午後になり、妻は「避難した方がいいのでは」と、私に相談してきました。実は、ずっと前からそう思っ

ていたそうです。でも、避難所スタッフとして動いている私のことを思い、自分の思いを口にするのを我慢していたそうです。もう限界だそうです。私もどうしていいかわかりませんでした。

私もパニック。思い出せない。

それから……夕方まで、私は一体何をどうしていたんだか、この手記を書いているも未だに思い出すことができません。この部分だけは、どうしても書くことができません。できないんです。たぶん、自分は、心の中でパニックに陥っていたんだと思います。避難所スタッフとしての自分、家族を大切にしたいと思っている自分、2つの思いが交互に入り乱れていたんだと思います。懸命に避難者の対応をしているスタッフと一緒に無我夢中で何かをしていたんだと思います。

恐れていたことがさらに起こりました。

命の危険を感じて

夜8時頃、今度は2号機原子炉が空焚き状態になったと発表されました。空焚き？原子炉が空焚き？……何かが変わろうとしていました。私は、原子力発電については素人ですが、原子炉が空焚き状態に陥ることが、どれだけ危険な状態なのかは、容易に想像することができます。1号機水素爆発、3号機水素爆発、この時点で大量の放射性物質が飛び散っています。そこに2号機原子炉が空焚き状態です。きっと、まもなく2号機も水素爆発を起こすことでしょう。いや、空焚き状態ですから、もしかしたらそれだけでは済まされないかもしれません。そして、ここは第一原発から22キロ圏内にあります。もしも、そのような事態になったら、命の危険にさらされるかもしれません。

「先生方は、もう避難した方がいい。家族を大切にしないといけない。」

そう言われました。先生方は……？え？校長先生と教頭先生は……？私は耳を疑いました。「校長先生と教頭先生はどうされるんですか？」私は、教頭先生に聞きました。「ここに残る。でも、いよいよの時は避難するから。」その言葉には悲壮な思いと、命を賭けた強固たる意志が感じられました。

そんなことはできない。私は強く思いました。お2人を残して、自分だけが避難するなんてできないと思いました。私は「分かりました」とは、言えませんでした。

した。しばらくして、先生方同士でも話し合いがもたれました。避難についてどうするか。みんなどうしていいかわかりませんでした。家族のこと、避難所のこと、きっとたくさんの思いが交錯していたんだと思います。でも、「俺もいずれ避難するから、みんなも順番に避難しよう」と声をかけました。自分は最初から避難するつもりはありませんでした。この場に居続けることが、自分の使命であると思っていました。でも、誰かが「自分は避難しない」と口にすれば、先生方はみんな行動できなくなってしまいます。だから、「順番に避難しよう」と声をかけました。

究極の決断でした。

先生方も次々に避難を始めました。それぞれが、それぞれの場所に避難することになりました。何か後ろめたい、申し訳ない思いを抱きながらの避難でした。ここ川内小避難所は、当時すでに固定電話を含め携帯電話すら使用不能に陥っていました。あるのは、何とか準備できた衛星電話のみです。ですから、誰とも連絡が取れない状態になっていたんです。そこで、この事態です。誰も救助には来てくれません。ここは危険な状態だから、私たちは国からもしかしたら見放されたかもしれない。みんな口々にそう言っていました。そうではなかったんでしょうけど、置かれている究極の状況の中では、「見放された」そう思わざるを得ない雰囲気になっていました。

もう終わりかもしれない……。死ぬのかな……。

妻には何度も何度も説得されました。妻の必死さは痛いほど、私には分かりました。でも、私はなかなか決断することはできませんでした。様々な思いが、私の中で交錯していました。そこで、私は考えました。まずは、妻と愛犬だけ、妻の実家がある福島市に避難させ、自分はここに帰って来ようと思いました。もしかしたら、福島市でも大変な状態になっているかもしれませんが、ここよりは安全だと思ったんです。まず、家族を安全な場所に避難させ、そして、自分はここに帰り、避難したくても避難できない避難者の方の対応をする。そう心に決めました。

妻に避難することを話しました。そして、避難の準備を始めました。私たち教職員スタッフが次々に避難をしている状況ですから、周囲のみなさんにも影響を与えかねません。私は、荷物を放送室の窓からひっそ

りと運び出しました。何回も何回も窓から出入りしながら、とても惨めな思いをしました。避難者の方に申し訳ない。校長先生、教頭先生に申し訳ない。役場の方に申し訳ない。そんな気持ちでいっぱいでした。

私も避難

あれは、夜11時過ぎくらいのことでした。校長先生と教頭先生は、校長室で話し合いをしていました。私は、お2人の顔を直視することができませんでした。私は避難することを相談しました。お2人は快く応じてくださいました。この時点で、私は「自分はここに戻ってくる」ということは言えませんでした。言ったら、きっと「そんなことはしていけない」と言われると思ったからです。泣きそうでしたが、ぐっと堪えました。お2人の優しさに応えるために……。

その後、私はまだ残っていた1名の教職員スタッフに「自分も避難するから、先生も早く避難した方がいい」と話をしました。先生は、そうすると言ってくれました。

たぶん、こうするしかない

真夜中、妻と共に福島市に向かうことにしました。車に乗り、エンジンをかけました。このスイッチが今までにないくらい重たく感じました。ああ、自分はまだ押したくないんだと思いました。川内小が、バックミラー越しに少しずつ見えなくなっていく。それと同時にものすごい罪悪感と後ろめたさが押し寄せてきました。これで本当に良かったのだろうかと思いました。でも、妻の表情が幾分和らいだので、「たぶん、こうするしかなかったんだ。」自分の心に何度も何度も言い聞かせました。

3月15日

□ 客観的データ

- 午前6時10分 福島第一原発2号機で爆発音。経済産業省原子力安全・保安院は「放射性物質が漏洩する恐れ」と発表。
- 午前9時40分 福島第一原発4号機の原子炉建屋4階で出火。福島第一原発の半径20～30キロの住民ら約14万人を対象に、屋内退避を指示。
- 井出茂氏の証言 遠藤村長は15日に議会議員と区長を集めて、再度会議を開いた。一刻の猶予も許されない状況で、彼は村のトップとして、村民の安心安全を最優先に考えて、国の指示とか県の指示ではなくて、16日に避難を始めると決断するん

です。自ら考えて、自ら判断し、自ら行動したっていう意味で非常に僕らは頼もしく感じました。

□ 証言 福島市へ避難する。校長先生、教頭先生……ご無事でしょうか？

福島市に向かうためには、普段は葛尾村、浪江町津島、川俣町を歩いていけば、ここから約1時間20分程度で着くことができます。でも、地震による道路状況の危険と放射性物質がそちら方面に飛散されているかもしれないという情報から、私たちは郡山市を経由し、遠回りをして福島市に避難することにしました。

驚いたことに、川内村を出ると、膨大な数のメールと着信履歴が私と妻の携帯に入ってきました。よかった。ここは、まだ電波が入る。改めて川内村の通信不能状態の恐ろしさを実感しました。やっぱり見放されていたのかもと、また思ってしまいました。メールと着信履歴からは、私たちのことを心配して下さったたくさんの方がいることを感じました。そして、自分は一人じゃないんだと思いました。妻は福島市の実家に連絡をし、実家の母の無事を確認しました。そこに避難させてもらえないかとお願いました。妻の母は、ゆっくりでいいから、焦らずに来るようにと話してくれました。よかった。これで妻を避難させる場所が確保できた。私はそう思いました。

「あなた、私を実家に預けて、川内小に戻るつもりでしょ？」

突然、妻に言われました。私の表情や態度から、妻は、私が実は戻るつもりではないかとずっと考えていたそうです。福島市に着くまで、何度も何度も説得されました。沈黙が続くと、「ダメだからね。絶対に戻らせないからね。」と説得されました。しばらくの間、私は返答ができませんでした。私自身も迷いが生じ始めていました。命の危険にさらされていることよりも、何かこう違うことを考えていました。それは、膨大な数のメールと着信履歴があったからなんです。

自分はたくさんの人に支えられている。

自分はたくさんの人に心配されている。

自分はたくさんの人のおかげでここまで来ている。

今、何に答えるべきか。

今、自分がなすべきことは何なのか。

そう思い始めたら、自分はこのまま避難することが、

実は、自分にとって、自分を支えてくれるたくさんの方の思いに応えることになるのでは、という考えにたどり着きました。真っ先に、校長先生のやさしい笑顔と教頭先生の強い思いが、目に浮かびました。

避難しよう……。たくさんの方の思いに応えるために……。

私たちは、福島市の妻の実家によくたどり着きました。深夜2時半頃だったと思います。こちらも、被災しているので大変な状況でした。でも、見慣れた場所に戻ることができ、妻は安堵の表情を浮かべていました。私もこれで良かったんだと、何度も何度も自分に言い聞かせていました。でも、妻には何度も何度も諭されました。戻ることが、校長先生と教頭先生の思いに応えることにはならないと、言われ続けました。避難することを決断しましたが、私は、何かこう複雑な思いが自分の中に入り乱れていました。その日の夜は、久しぶりの布団に入りましたが、眠ることはできませんでした。やっぱり、これでよかったのだろうか、と思いました。避難所に残られたお2人の姿ばかり想像していました。

余震震度5

朝になり、大きな余震が起きました。震度5はあるみたいです。これ以上私たちを苦しめて、何をどうしろというのでしょうか。私はこの天災に憤りを覚えました。

2号機はついに爆発しました。

恐れていた事態になりました。福島市は、この時点ですでに高い放射線量を示しています。このままでは、ここも危ないかもしれません。私たちは、いつでもここから避難できるようにと、玄関に避難準備物を用意しながら、現状を注視していました。あの頃、山形まで避難する計画もありました。行くあてはありませんけど、とりあえず遠くへ、もっと遠くへ避難しようと考えていました。

時間は覚えていませんが、その日の昼間に教頭先生より連絡がありました。自分も家族を連れて、避難したこと、そして、これから、川内小へ戻るということです。安心しました。教頭先生が無事でいたこと、家族のみなさんが避難できたこと、何より教頭先生の元

気な声を聞いたことが嬉しかったです。

ただ……その後……

校長先生と全く連絡が付かない

ということなんです。背筋が凍り付きました。教頭先生の話によると、校長先生は、避難者の方と共に、川内小にまだ残っていられる、とのことでした。しかし、川内村は現在も通信不能状態です。連絡のつけようがありません。私は、何度も何度も電話とメールを試みましたが、無理だとは分かっていたのですが、心配で心配でいてもたってもいられなかったんです。戻りたい。本気でそう思いました。ただ、自分が支えなければならぬ家族もいる。心の中で葛藤しました。そして、どうか、どうか、ご無事でいられることを願いました。

テレビでは、川内村が全村避難をするかもしれないという報道が流れていました。早く……早く……避難してくれ。ずっと、そう思っていました。

祖母の救助へ

程なくして、私は、自分の両親たちとようやく連絡が取れました。両親と祖母と妹夫婦は、川内村から避難し、現在、郡山市にある安積高校の体育館にいてということ、別な場所へ避難している妹夫婦から連絡を受けました。ですが、両親が怪我を負っていること、そして、高齢の祖母が心身ともに危険な状態かもしれない、ということが分かりました。

この頃、福島県のガソリンスタンドは、震災の影響でほとんど給油できない状態でした。

私の車には、郡山市を往復する程度のガソリンはあったので、祖母だけでも、救助に向かうことにしました。両親や妹夫婦には、申し訳なかったのですが、祖母を連れて行くだけで精一杯の状況だったんです。ここでも、究極の選択を迫られました。両親たちは、知り合いも含め、たくさんの方と安積高校体育館に避難していました。ですから、両親や妹夫婦だけを救助するのは、難しい状況でした。なので、両親や妹と相談し、まずは祖母だけを救助することにしました。

そのことにより、自動的に私が川内村へ行くだけのガソリンはなくなってしまいます。福島市から避難するためのガソリンもなくなってしまいます。でも、私たち夫婦は祖母を救助しに向かいました。途中、ホームセンターに行って、体育館での寒さをしのぐものを

たくさん買い込みました。妻の母からは毛布もお借りしました。あのとき、最悪なことに外は雪が舞っていました。後から分かったのですが、あの雪にはたくさん放射性物質が含まれていたようです。そのことを思い出すだけで、恐怖が蘇ります。

でも、救助に向かいました。祖母は疲れ果てていましたが、私たちが来ることで少しでも元気になっていました。両親は、着の身着のまま、血だらけのまま避難していました。母の表情は顔面蒼白でした。きっと、骨折した右手の痛みを耐えていたんだと思います。父は頭部に怪我を負っていても、気丈にも長として振る舞っていました。ですが、現金はほとんど持ち合わせていなかったの、父にはこっそり自分が持ってきた少しばかりの現金を渡しました。一緒に連れて行けない気持ちがあったので、これで、少しでも不安を解消してもらいたいと思ったんです。

祖母を車に乗せ、福島市の実家に戻りました。少しずつですが、家族の状況もわかりはじめ、私は少しだけ気が楽になりました。

ただ……校長先生とだけ、連絡が取れない。それだけが、不安で不安で仕方ありませんでした。

早く、早く、川内村の全村避難が進んで欲しいと願っていました。

3月16日

□ 客観的データ

- 福島第一原発4号機で2度目の火災。福島市の水道水から放射性ヨウ素とセシウムを検出。国の安全基準は下回る。
- 16日、川内村は、受け入れの正式な承諾もないまま村長を先頭に郡山市の大規模施設ビッグパレットふくしまに向かった。
- 井出茂氏の証言 「村長は防災無線を通して、『これからふるさとを離れるけど、ふるさと再生のときには、みんな笑顔で一丸となって頑張りましょう。それではみなさんお元気で』とメッセージを流しました。」

□ 証言 よかった！ 校長先生が無事でいてくれた！
そして……

川内村全村避難

明るる16日。ついに川内村全村避難が宣言されました。これに合わせて、川内村にあった避難所も閉鎖になります。つまり、これらの人たちもマイクロバス等で他地域に避難することになりました。主な場所は、郡山市にある「ビッグパレットふくしま」という施設だそうです。ということは……校長先生は……？

連絡が来ました。
待ち望んでいた連絡が来ました。

校長先生からは、無事避難が完了したことや、その経緯などを教えていただきました。私は、校長先生が無事でいられたことに安心しました。校長先生と教頭先生のお2人を置いて避難したことをずっと後悔していましたから、やっと胸のつかえがおりました。そして、何よりも校長先生ご自身の声を聞けたことが、本当に本当に嬉しかったです。

原発事故の状況は、いっこうに良くなりませんでした。むしろ、悪くなる一方でした。ですが、校長先生の無事を確認できたことが、その時の私にとっての一筋の光明となりました。だから、私は……

「自分が、次に為すべきことは何か」について考え始めました。

そう思い始めると、川内小学校の子どもたちの行方がとてもとても心配になりました。子どもたちは、どこで何をしているのでしょうか？無事にいてくれるのでしょうか？たぶん、このことが次に為すべきことだと、私は考えていました。(了)

～第2部へ続く

注

- 1 第一著者にとっては、猪狩氏は大学院の指導生であり、修了後も、懇意にさせていただいている。彼は、本報告を避難生活の困難な中で書き上げた。その人となりや多少とも知っていただきたいと考えて、あえてそのプロフィールの一部を紹介させていただく。

昭和46年11月12日生（現在40歳）双葉郡富岡町出身。双葉郡富岡町夜ノ森在住（現在は福島市笹谷の借り上げ住宅在住）。

平成6年度に福島大学教育学部卒業後、講師を経

て、平成9年度に正式採用（いわき市立汐見が丘小学校）され、平成13年から広野町立広野小学校勤務、平成16年から福島大学大学院教育学専攻に現職教員派遣（道徳授業研究、平成17年修了）、平成19年に川内村立川内小学校勤務、平成20年9月Jヴィレッジにて企業派遣（同年12月まで）、そして、震災当時、川内小学校勤務4年目となる。当時の主な校務は、教務主任・特別支援学級担任だった。平成23年8月に人事異動により南相馬市立原町第三小学校になるが、兼務発令により、そのまま川内小学校勤務となる〔なお、川内村立川内小学校は、平成23年4月より郡山市立河内（こうず）小学校の空き教室を借りて、開校となる（全校児童数約55名）。平成24年4月、川内村の婦村宣言を受け、川内村にて小学校を再開する（全校児童数約16名）〕。平成24年4月川俣町立富田小学校勤務 現在に至る。

2 周知のように宮城県石巻市立大川小学校では、全校児童108人のうち、その7割に当たる74人（行方不明6人）が命を落とし、教職員も13名のうち、10名が犠牲となった。

3 2011年8月6日に開かれた新道徳授業研究会の席上で、猪狩勝人氏は、避難所となった川内小学校での様子を語った。猪狩氏の話聞くうちに、第一著者は、「是非、記録として残して置かなくてはならない」と思った。こうした避難所での取り組み、とりわけ、公務員としての教師たちの取り組みは、子どもたちに対するそれだけではなく、地域の避難場所として設定されている学校は、地域住民の不可欠の場所として再認識されたきらいがある。そのことをしっかりと伝えることが教職員には課せられていると感じたのである。

また、この思いを後押ししたのは、震災後、福島大学人間発達文化学類の授業「総合演習」において臨時担当者の一人として「震災後の子どもたちの学びと遊び」をテーマにかかげて実施したことだった。

教員志望の4年生と2011年5月から7月まで、大震災について新聞記者たちやフリージャーナリストたちがまとめた、生死を生き延びた人々や子どもたちの記録を読み進めた。しかし、学校教師たちの取り組みは紹介されていなかったのである。是非記録として残してほしいと強く思った。そして、猪狩氏に対して、研究会の席上でも、また、その後の懇親会でも、強く勧めた。

猪狩氏は、すでに、警戒区域の富岡町の自宅から福島市への避難生活を送りつつ、郡山市河内小学校

に間借りして運営されていた川内小学校で、子どもたちの不安な気持ちと向きあいながら教職生活をされていた。この状況において執筆を依頼することは酷に思えたが、是非にとお願いしたら、「是非、書いてみたい」と承諾された。その後、高島仁校長とも連絡を取っていただいて、書くことへの承諾をいただいた。

4 原発事故に関するデータ等は、福島民報社編『東日本大震災 原発事故 ふくしま1年の記録』（2012年）を参照した。

5 同上書、202～203頁。

6 和合亮一『ふるさとをあきらめない フクシマ、25人の証言』新潮社、2012年によれば、井出茂氏（旅館経営者、村会議員）は、「かわうちの湯」「いわなの郷」「いわなの郷コテージ」を富岡町民の受け入れの準備をしたと書いているので、この3カ所を加えると、避難場所は、20カ所になる。

7 同上書。以下の井出氏の証言も同上書から。

8 富岡町からの避難者には、もちろん障害者もいた。中村雅彦『あと少しの支援があれば 東日本大震災 障がい者の被災と避難の記録』ジアース教育新社、2012年には、以下の記録がある。「全盲夫婦の避難40代男性 夫婦ともに視覚障がい 富岡町から6回避難先を変えて郡山市の仮設住宅へ 身体障害者手帳1級」。11日に富岡町内の福祉センターに避難したあと、12日には、「ところが、翌12日の朝7時前に、川内村に避難するよう指示があった。なぜそこへ行くのか理由はわからなかった。／川内村に知人の車で移動した。ふだんなら1時間足らずで着くはずなのに、渋滞がひどくて5時間以上もかかった。その間は飲まず食わずだった。小学校の廊下に腰を下ろした時に、やっとおにぎり1個手元に届いた。その夜は廊下で過ごした。床はタイルで冷たく、糖尿病の身には耐え難かった。周囲がまったく見えず、どこにどんな人が避難しているのかもわからなかったが、どこかで『ヨウ素を飲みなさい』と子どもたちに呼び掛けている声が聞こえた。／ここでの避難生活には耐えられず、数日後にいわき市好間の親戚の家に身を寄せ……」と書かれている。

障害者の受け入れについて猪狩氏は、「当初、各教室などにいましたが、みなさん精神的に不安定になっており、声を上げたり、動き回ったりして、大変な状態になっていました。まわりの方からも苦情が出ていたように記憶しています。なので、そこにいた担当者らしき方からスタッフが相談され、役場

スタッフと校長先生・教頭先生が相談して、体育館の2階に移動してもらいました。体育館の2階は広いスペースがあったので、そちらにいただきました。寒いので、ストーブを持って行ってあげた記憶があります。先に避難されたようですが、いつ避難されたかは記憶していません。」と証言している。なお、この全盲夫婦が同じように体育館の2階スペースに移ったかどうかは不明である。